

<スポーツを解析する(その7)>

ハンガリーのロードレース事情

盛田 常夫



9月28日の国際マラソン選手権(ハンガリー・マラソン選手権、駅伝競走兼)、10月12日の女子10キロ走で、ハンガリーの今年度のロードレースは幕を閉じた。6月初めのマラソンリレーに続き、「ハンガリー=日本混合チーム」は2度目のマラソンリレーを走った。今回は6月のリレーチームから日本人2名を外し、ハンガリー人の新しいメンバーを1名加えた5名のチームで、42.195キロを走破した。若い数学者と物理学者、工科大学学生のキックボクサー、ヘリアホテルのフィットネス・チーフトレーナー、それに私。3時間を切ることが目標だったが、わずかに及ばず3時間1分42秒でゴールした。アンカーの私が思い切って飛ばせばよかったのだが、時差ボケとスピード練習の不足で攻めきれなかった。

駅伝参加男子212チーム中、18位。2000名近い男子個人で3時間を切った人はわずか64名。女子では369名のうちわずかに2名。9月末にしては暑い20度を超える気温と、三八キロから続く曲がりくねったコースのために、全体として記録は伸びなかった。我が素人集団としては、これで良しとしなければならないが、私個人には少し悔いの残るレースだった。

ハンガリーの公式レース

国際陸連と国際マラソン・ロードレース連盟が公式サイト(www.iaaf.org、www.aims-association.org)に載せているハンガリーの国際公認ロードレースは、今年の日程で見ると、8月31日のNikeハーフマラソン、9月28日のKaiserブダペスト国際マラソン、10月12日の女子10キロClassicsの三行事である。残念ながら、今年の9月28日は世界各地のマラソンやハーフマラソン行事と重なり、一流選手はみなベルリンマラソンや



ポルトガルのハーフマラソンに流れてしまったが、もともとブダペスト国際マラソンの知名度は低い。今回走ってみて分かったが、37 キロから 40 キロにかけてのコース設定がまずい。37 キロまではアンドラーシュ通りとドナウ河の堤防道路を走るすばらしいコースだが、そこから上の道路に上がってバスの発着場を通り抜け、安普請のパネルハウスの間を何度か曲がって、ヴァーツィ・ウートからドージャ・ジョルジュに入るようになっている。この部分のコースを設計し直さないと、それまでの景観が帳消しにされる。

1996 年から新しいスポンサーで再開された Nike ハーフマラソンでは、日本選手が 1997 年から 1999 年まで、男女とも三連勝している。とくに女子は三年連続で 1 位から 3 位まで独占したが、以後、日本選手の参加はない。今年の世界選手権のマラソンを走った油谷繁選手も 1998 年に出場し、2 位になっている。日本の女子選手ならトップクラスでなくても、表彰台を独占できる水準である。昨年は男子でケニア選手が表彰台を独占したが、今年はこれといった外人選手は参加しなかった。

2001 年の 10 キロ Classics は、Avon 女子世界レースの最終戦に指定されたので、世界から一流の女子選手が参加した。優勝はケニアのヌデレバ。マルギット島の噴水辺りから出発して、アルパード橋に出て、そこからペスト側のドナウ河沿いの道路に降りる。ドナウに沿って鎖橋まで走り、そこでターンしてマルギット橋の袂まで戻る。そこから橋に上がってマルギット島の陸上競技場に向かう 10 キロが、このレースのコースになる。

素人が参加できる

ブダペストのロードレースの知名度が低い分だけ、素人が安心して走ることができる。

まず、参加人数が少ない。どこの首都マラソンでも一万人を超える参加者がいる。ブダペスト国際マラソンでは、本番に先立つミニマラソンには四千人を超える人が参加し、全員が出発点を通り過ぎるまで 7 分かかったが、本番のマラソンでスタートラインに立った人数は、個人走者 2225 名とリレー走者 621 名の 2800 余名である。マラソン参加者は少な

いが、この日は英雄広場後ろのヴァーロシュリゲット公園でスポンサー主催の各種の行事がおこなわれ、周辺一帯が一大イベント会場に変わり、マラソンが終わるまでお祭り騒ぎだった。

また、ブダペストマラソンでは最初の足切りがない。今年から東京国際女子マラソンに一般ランナーも参加できるようになったが、男子は3時間15分以内、女子は3時間30分以内の記録証明が参加資格で、記録順で2700名の限定付だ。加えて、市民ランナーのスタート場所は国際レースと区別され、途中で合流するようになっている。確かに日本のレベルは高いし、東京の交通の混雑度を考えれば、ある程度の参加資格の制限は必要だろうが、それでもこのタイム設定ではほとんどの市民ランナーは参加できないし、他国の首都マラソンのように、全員と一緒にスタートを切るという遊び心もない。

これにたいして、ブダペスト国際マラソンでは5時間30分のペースで、最後尾からバスが付いていき、このペースより遅い走者をピックアップしていく方式をとっている。出発点では、男子が2時間30分以内、女子が3時間以内で走る走者がエリートゾーンと呼ばれる最前列から出発でき、後は3時間以内、3時間30分以内等々のゾーンから、自己判断で出発できるようになっている。

ブダペスト国際マラソンの面白い点は、ハーフマラソンもそうなのだが、リレー種目を組入れ、これを個人の走者と同時に出発させていることだ。リレーの第一走者も、個人の走者と同じく、チームの目標タイムにしたがって、出発ゾーンを選ぶ。国際マラソンの場合には、「Ekiden váltó」と呼ばれる5名のリレーと、「Staféta (リレー)」と呼ばれる3名のリレーの二種目がある。走る距離はどの種目も均等ではない。Nike ハーフマラソンでもリレー種目があり、13キロと8.1キロのペアで参加できる。さらに柔軟なことに、マラソンやハーフマラソンの走者がリレーの第一走者を兼ねても良いというルールもある。ハンガリーが「Ekiden」という用語を使っているのは、千葉国際駅伝にハンガリーチームが参加したことが契機のようなのだ。

気になる点の一つ。ハーフマラソンもフルマラソンも、計測チップを埋め込んだ小さなプラスチック片を直接にシューズに取付けるか、それにマジックテープを通したものを足首に巻くことになっている。出発地点、途中計測地点、ゴール地点に敷かれたマットを通り抜ける時に、時間がセットされる。足首というのは、センサーの感度が膝上までしかないという制限による。しかし、リレーの場合、次の走者との間でチップの取り外しと巻付けをやっていたのでは時間をロスする。我々のチームはこの無駄を排除するために、手首に巻付け、手渡しで次の走者に渡した。実際の計測は出発点とゴール地点だけだから、その時だけ手首からチップを外して、膝下の位置でチップがマット上を通過するようにした。多くのチームはバトンゾーンで足首のチップを外し、次の走者の足首に巻き直していた。これだけ技術が進歩している時代に、もう少し工夫できないものだろうか。このチップは5000フォリントの預託金で貸し出され、レースの後に返せばお金が戻ってくる。この計測チップはスロベニアの会社が保有しており、中欧のロードレースに貸し出しているようだ。

チップ計測のおかげで、号砲から出発アーケードをくぐるのに時間がかかっても、マット上を通るまで計測が開始されないようになってきているから、すべての走者についてネットの走行時間が計測できるようになっている。

マラソンリレーへの誘い

ハンガリーのユニークな行事に、国会議事堂周辺の7キロの周回コースを6人で走るマラソンリレーがある。6月に我々が初めてチームを組んで出場した行事がこれだ。国会前を出発し、マルギット橋からドナウ沿いの道路に降りて、ヘリアホテル裏まで行き、そこからUターンして鎖橋の袂まで戻る。ここで再びUターンして国会裏手前から上の道路に上がり、そこから建物の間を歩いて出発地点に戻る。全員同じコースでバトンを渡していく。この時の様子は、『ドナウ通信』第56号(2003年7月)に詳しく書いたので繰り返さない。

このリレーは国際陸連の公認行事でないが、ハンガリーのロードレースの最大のイベントと言ってもよい。ほぼ700チーム四千人強の人が国会周辺を走る。老若男女、太った人から痩せた人まで、プロのチームからまったくの素人のチームまで、一年に一度7キロを走ってみようというお祭りだ。難点はバーコードの付いたバトンをもって走らなければならないこと。日本の「たすき」が合理的だと思うのだが。千葉国際駅伝に参加したことのあるハンガリーの事務局担当者によれば、「たすき」を提案したが採用されなかったという。確かに、たすきにチップを付ける場合には、センサーの位置を考える必要はあるが、たすきの良さは経験しないと分からなそう。

今から来年のこのリレー行事のチームを編成しようと考えている。すでにシュディ元駐日大使夫妻の参加を取付けた。男女別の「日本-ハンガリー混合チーム」を作る。参加希望者は連絡して欲しい。競技当日まで7キロを最後まで走れる走力さえあれば記録は不問。それ以外の参加条件はなし。参加希望者が多ければチーム数を増やす。このチームの目標は記録ではなく、全員で42キロを走り切ること。7キロを走る練習方法は、個人の走力に応じて教示する。

これとは別に、3時間を切るチームを編成する。足に自信のある人はこのチームで走る。このチームに入る条件は、7キロ30分以内の走力。駅伝の本場から、是非、複数のチームで参加したいものだ。